

2021年9月14日(火) 10:00-12:00

2021年度ウェルカムバック支援プログラム(開講式挨拶)

向井 剛

2021年度開催の「女性のための ウェルカムバック 支援プログラム」に対して、9名の方の申し込みがありました。コロナ禍にあって、躊躇いながらの出願であったことでしょう。しかしこうして開講式に臨んだからには、この9名が講師の方々の指導を得て、結束力強く、互いの活動を通して、自身が持つ長所に気づき、それを生かすことができる仕事を見出す決意を持っていただきたいと思います。

なぜ大学がこの種の社会人向けのプログラムを行うのか。学生の教育に専念すればよいのではないか、という声が聞こえてきそうです。それは、一つに本学は公立の女子大であること。しかも建学の精神に、「次代の女性リーダーを育成」を掲げていることがあります。スローガンとして掲げられた<男女共同参画社会>の実現には、いかなる困難があるのか、女性生涯のライフ・デザインを描くのにどのような課題・問題が潜んでいるのか、こうした事柄を大学自らが理解し、それを踏まえて学生の教育・指導に当たる必要があると考えるのです。本プログラムの企画・運営にあたって、多大な準備と時間、そして労力を要しているのは事実です。しかし、本プログラムを提供することにより、我々もまた生涯学習の在り方を学ぶ大事な機会となっています。やりがいのある社会実践であり、また学習実践と言えるわけです。

応募の動機を拝見しました。結婚、子育て、転勤、介護という言葉が並んでいます。男性である私にとって、胸に刺さる言葉です。私自身も、幾度かの転勤・転居を経て、この地に落ち着きました。妻や家族に強いた、或いは強く協力を求めた事柄は、必ずしも家族には納得のいくものではありませんでした。家族の不安を支えきれなかった部分は、友人や地域の人たちのお世話になったようです。こと介護については、30年程前の上野千鶴子さんの言葉が思い起

こされます。それは、「私が公になる」（つまり、家族の仕事と思われていた世話を、社会に委ねる）というものです。女性の家庭の仕事・役割を、社会に委ね、自分の身を放つという趣旨でした。男性は言うに及ばず、社会が女性から託された仕事を受け入れ、引き受ける必要があります。その一方で、一時期、育児や介護などに専念した女性に、その求めに応じて復帰するための仕組みを社会が整える必要があります。本プログラムを文部科学省や福岡県（もちろん本学も）が後押しするのは、このような背景からでしょう。

本学のプログラムは、3つのステップから成り立っています。「自分を再発見」「自己を磨く」そして「新しい自分への再挑戦」です。自分の中に他人が深く入り込んでいます。「自分とは他分である」と言われるゆえんです。第1ステップにおいて、仲間と交流なくしては、自身をクリアに確定し、再発見できないでしょう。ここに集う人たち同士、大いに交流を図ってください。

第2ステップの「自己を磨く」ですが、病は体の弱いところから浸食されていきますが、自己表現や自己実現は、自分の強みを磨くところから始まるはずで、弱点を気にしては、ステップ2を乗り切ることはできません。

ところで、人は誰もが歴史的な存在です。「私」という個人の中に、過去の人たちの思い、家族の思いが流れ込んでいます。最後のステップ3では、女性の歴史を自らの身に引き受けて、力を蓄え、社会の今ある環境と制度を活用しながら、新しい道を拓いて行ってほしいと思います。

再び応募書類に戻ります。そこに「私らしく働く」という言葉がありました。これから始まる5ヵ月に及ぶプログラムでの学びにより、「<新しい私>らしく働く」と言い換えて、11月に実施されるドラフト会議に臨んでください。我々一同、応援しています。